

優秀賞論文要旨

恋愛マニュアルとしての少女マンガ

—「天使なんかじゃない」を読み解く—

船 原 ま ど か

少女漫画家矢沢あい作品「天使なんかじゃない」は、1991年の開始から1997年の連載終了まで、コミックスは全8巻になり更に連載終了から3年後に完全版としても再び出版されている。この作品は10代後半から20代の女性に根強い人気があり、矢沢あい注目され始めた時期の代表作とされ、この作品から矢沢あい固定の読者がつき始めた。今では圧倒的な読者の支持を受ける矢沢あいの、そのきっかけともなった「天使なんかじゃない」に興味を持ち、この作品について研究、考察することとした。主に女性を主人公とし、恋愛の成就をテーマとして描かれる少女マンガのジャンルに属する「天使なんかじゃない」を読み解くことで、現代女性の求める女性のあり方や性役割、恋愛への姿勢や理想とする男性の傾向が得られるのではないかと考えた。

方法として、作品の登場人物とストーリーの分析を足がかりとし、ストーリーを追いながら、描かれる恋愛像、女性像や男性像に加え登場人物のなう役割を分析、そしてその登場人物の恋愛の姿勢や性格について比較をした。

その結果「天使なんかじゃない」という作品は特有の恋愛観とも言える「恋愛ステレオタイプ」を支持して描かれていることが見出され、主要登場人物から、いくつかの特定の恋愛観が伺えた。まずストーリーの主軸となる「運命の男性との出会い」は他の男性には心変わりをしない貞淑さを表し、主人公の「待つ女」という性格は従順さ、ハッピーエンドとされる「男性に守られる女性の幸せ」は完全に庇護を受ける女性の幸せ、などというエピソードが見られ

た。そしてこれらの恋愛観には従来のジェンダー・ステレオタイプとの違いがあまり見られなかった。

さらにジェンダーの観点以外にも「天使なんかじゃない」からは、「この登場人物のような女性であればこんな幸せになれる」、「恋愛において幸せになりたいのなら、この登場人物のようなことはしてはならない」というような女性読者への恋愛における姿勢の指標も見られた。

ジェンダーの観点から、21世紀、仕事やスポーツ、趣味の場へも女性が社会へ出て活躍するのがあたりまえのようになったと思われる時代、女性のジェンダー観は変わってきたと考えていた。しかし実際はこのような結果となり女性の抱くジェンダー観にあまり変化は見られないように見られた。

今後他の少女マンガ作品も描かれているジェンダーの点から分析をして、その変化や時代の特徴を見たい。近年女性の社会進出が進み、変わってきたとされるジェンダー観と、理想とされる恋愛像の中におけるジェンダー観にはどのようなギャップがあるのか、興味深い点は多く、これからも課題として関心を持っていきたい。